

種苗管理センターニュース

Center for Seeds and Seedlings, NARO

第 97 号



雲仙農場 全景

- 巻頭言 農研機構理事長 “農業・食品版 Society 5.0 の実現へ向けて”
- 農場便り 上北農場
雲仙農場
- 特集 【若手調査員に聞く】～ いま何してる？ ～
- トピックス 海外から来所された方々との技術交流について

農研機構 種苗管理センター

「農研機構」は、国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構のコミュニケーションネームです。

農業・食品版 Society 5.0 の実現へ向けて

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。昨年、1月に発生した令和6年能登半島地震、8月の日向灘を震源とする地震に加え、9月は能登半島で豪雨が発生するなど、被災地域の皆様には大変厳しい一年であったと存じます。被災された皆様にお見舞い申し上げるとともに、復興が一日でも早く進み平穏な日常が戻りますこと、そしてすべての皆様にとって今年が良い年になることを、心よりお祈り申し上げます。



日本の農業・食品産業は、大きな変革期にあります。我が国の農業を取り巻く環境を見ると、就農者の減少と高齢化、飼料や肥料の価格高騰、越境性感染症や病害虫の流行、気候変動による生産の不安定化などの問題が顕在化しています。これを受け、昨年、25年ぶりに食料・農業・農村基本法が改正されました。

私は2018年4月の理事長就任以来、農業・食品分野のSociety 5.0※実現により、①「食料自給率向上と食料安全保障」、②「農産物・食品の産業競争力強化と輸出拡大」、③「生産性向上と環境保全の両立」に貢献することを農研機構の組織目標として掲げてきました。これらは、改正食料・農業・農村基本法の方針、みどりの食料システム戦略の目指す姿や石破総理が掲げる地方創生2.0とも完全に一致します。環境と調和のとれた持続可能な食料システムの確立は喫緊の課題で、新たな価値を創造し、イノベーションで日本の農業を改革することが求められています。

昨年のノーベル賞は、物理学賞、化学賞ともにAIに関係する研究業績が受賞しました。これは、異分野融合によって創生されたAIが社会に広く大きなインパクトを与えていることを示しています。すでに私たちの生活でもAIを身近に感じるようになりました。今後、私たち研究機関は、AIに代表される先端技術の急速な進化を先読みし、国益に資する研究開発をリードする必要があります。このような中、農研機構は昨年国内初となる農業用生成AIを発表しました。生成AIは学習した膨大なデータを使って、テキストをはじめとする多様な形式のデータを自動的に生成する革新的技術です。農業の知識に特化した農業用生成AIは、農業分野のSociety 5.0実現に向けた強力なツールとなります。現段階では県の普及指導員への提供を想定していますが、今後、公設試をはじめとする関係機関の協力を頂きながら、より高度な農業用生成AIへと進化させ、スピーディに社会実装して参りますので、ご期待下さい。

2024 年には、スマート農業技術活用促進法も制定・施行されました。農業を取り巻く環境に対応し、持続可能な食料システムを実現するキーテクノロジーの一つはスマート農業技術です。農研機構は 2019 年より農林水産省と連携してスマート農業実証プロジェクトを進めてきましたが、新法に基づいて農研機構のは場や施設をスタートアップ等に供用し、技術開発と普及を加速します。理事長直下にスマート農業施設供用化推進プロジェクト室を設置して、施設供用や技術支援などを推進し、全国の隅々にまでスマート農業技術を本格普及させる所存です。

本年は、農研機構の第 5 期中長期計画（2021～2025 年度）の集大成の年です。農研機構は、農業 AI やスマート農業などの研究開発・成果の普及を加速するとともに、産学官連携のハブ機能を強化し、農業・食品分野の Society 5.0 実現に挑戦してまいります。関係の皆様には今後も変わらぬご支援・ご協力、農研機構との連携をお願いします。

※AI、データ、ネットワーク、センサー技術などを活用し、サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させたシステムによって新たな価値を創造して、経済発展と社会課題の解決を両立させた人間中心の社会を目指す考え方。

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構

理事長 久間 和生

農場便り【上北農場】

上北農場
青森県七戸町
総面積 197.7ha

主要業務

原原種生産（ばれいしょ）



上北農場は、本州の最北端にあって、津軽海峡、日本海及び太平洋と三方を海に囲まれた青森県の太平洋側に位置し、所在地である七戸町（旧天間林村）は雄大な八甲田山系を望む平地から山地に移行する丘陵地に位置しています。当地の気候は、一年をとおして変化に富んでおり、特に6月、7月には小雨や霧雨を伴った冷たい風（ヤマセ）が吹き気温が20℃に届かない日が続き、冬は北西の風にのって八甲田下ろしの雪が積もる気候となります。

農場近郊は、北には大間のマグロ、陸奥湾のホタテ、太平洋の鯖・烏賊等の海の幸と、西には標高1,000mを超える八甲田山系につながる森からの贈り物を多く味わえるところです。また、1時間ほど車を走らせると、春の新緑・秋の紅葉を求めて多くの人々が訪れる奥入瀬溪流、そして神秘的な美を湛える十和田湖、蔵王にも負けない八甲田山の樹氷があります。

このような環境の中で上北農場では、ばれいしょ原原種生産と遺伝資源の保存を職員15名で取り組んでいます。

ばれいしょ原原種の生産を担う業務部は、種苗生産と検定がチームとなって、それぞれを補完しながら一体的に業務を遂行しています。今年度も実需者への期待に応えるべく4月下旬に植付けし、8月下旬から10月にかけてポテトハーベスタで収穫を行いました。12月中旬には、9品種、9,077袋の原原種を北海道・青森県・岩手県・福島県へ配布しました。現在は冬期検定として、黒あし病検定、ウイルス病検定、土壌（シスト）検診などを行っています。

遺伝資源チームは、青森県の冷涼な気候を活かし、りんご1,077品種、くるみ79品種の保存を行っています。冬の剪定業務では業務部全体の応援も得ながら、作業しています。



ばれいしょ収穫風景



冬の剪定作業

上北農場のほ場の状況を紹介します。上北農場は昭和57年、むつ小川原開発に伴い六ヶ所村から当地に移転してきました。放牧地及び山林であった土地を大型重機を用いて造成した農地が大半を占めています。移転当時は、「トラクターが埋まり、救援に行ったブルドーザーがまた埋まりその救援のブルドーザーが必要になった」との状況であり、職員は排水対策や土作りなどの生産基盤整

備に力を注ぎました。移転後 20 年以上の歳月が経過して、ようやく努力の結果が実りはじめ、その後においても、排水対策・土壌改良を継続したことで、現在は収量が安定しています。引き続き土壌改良を継続し、品質改善を図り歩留まり向上を目指します。

これから、上北農場は本格的な冬のシーズンを迎えます。長い冬その先には少し遅い春が待っています。



太宰治の小説「津軽」の冒頭には「津軽の雪 こな雪 つぶ雪 わた雪 みず雪 かた雪 ざらめ雪 こほり雪」とあるように、様々な雪があります。

宿舎へ帰宅したら車が雪に埋もれていました。雪雪雪雪また雪よ・・・春を告げる湿った重いみず雪です。一汗も二汗、時には三汗以上もかきながら張り切ってスコップを握りますが、日に日に寒さと雪の重さが身にしみ辛さへと変わり春を迎えます。長い冬が明ければ、山の恵み「山菜」が待っています。また、青森に春を告げる花は桜だけではなく。菜の花、バラ、ぼたん、つつじ・・・。花の香りを感じながら散策すれば、きっと清々しい気持ちになるはずです。

少し遅い青森の春の訪れを感じてみませんか。

(上北農場)

農場便り【雲仙農場】

雲仙農場は、長崎県の島原半島内にある雲仙市に位置しています。島原半島北側斜面のほぼ中腹に農場があるため、標高 240m～390mで、農場用地の標高差が約 150mあります。農場からは諫早湾干拓や熊本県の対岸を一望することができます。年平均気温が 15.5℃で、半島内ではやや冷涼な気候にはなりますが、今年度の夏は例外なく暑い日が続き、特に9月は 3.0℃、10 月は 1.7℃も平年より平均気温が高く、厳しい残暑となりました。年間の降水量は全国平均の約 1.5 倍の 2,503mm であり、近年は梅雨時期に雷を伴う集中豪雨が多い傾向にあります。農場用地の総面積は 75.5ha です。土壌は安山岩を母材とした火山砕屑岩から成り、リン酸吸収係数が高く、pH は平均 5.7 程度。また、石礫が多いため、作物の栽培には酸度矯正と除石が欠かせません。

現在は、管理職 3 名、管理チーム 2 名、種苗生産チーム 6 名、遺伝資源チーム 3 名、栽培試験チーム 8 名の計 22 名に、契約職員の 8 名を加えた合計 30 名で各業務に従事しています。



種苗生産については、種ばれいしょを1月中下旬に植付けて、不織布による全面被覆栽培を行っています。5月中下旬に、デガーで掘り上げたばれいしょを手拾いによる人海戦術で収穫しています。そのため、収穫時期は臨時雇用や他チームからの応援を得ながら農場一丸となって作業に当たり、今年度は天候にも恵まれたこともあり順調に収穫を終えることができました。収穫したばれいしょは、風乾・選別・貯蔵後に8月上旬から秋植用原原種として、今年度は17品種、1,862袋を九州・沖縄・中国・四国地方に順次配布しています。



ばれいしょ収穫風景

遺伝資源は、茶・つつじ・かんきつ・うめ・カーネーション等の19種類、2,184品種・系統の栽培管理を行っています。



栽培試験 温室群

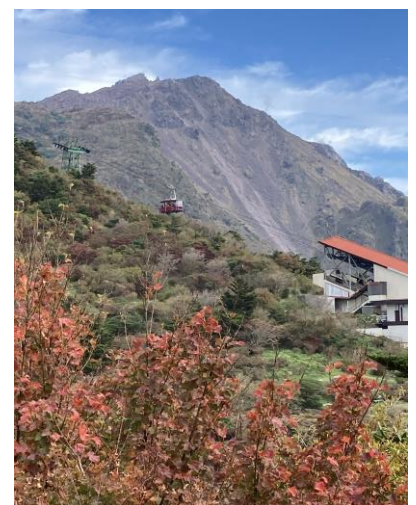
栽培試験は、令和5年度は30植物種類、201点の出願品種について試験を実施しました。種類ではアジサイの出願点数が最も多く、次いでトマト、イチゴで、その他に出願点数の少ない植物についても多種類を実施しています。また、令和4年度にトマト用の試験網室が2棟増築され、令和5年度もイチゴ用の試験施設を1棟建設するなど、出願点数が多い野菜類で栽培試験の高度化も推し進められています。雲仙農場の気候の特徴として、春の低気圧通過に伴う猛烈な強風と梅雨期の大雨が

たびたび発生するため、春からの露地栽培では防風ネットの設置と定植後の不織布によるトンネル被覆が不可欠となっています。

種苗検査と品種保護については、店頭検査・相談受付・DNA保存業務等を随時対応しています。

以上のように、雲仙農場はばれいしょの原原種生産・遺伝資源の保存・栽培試験・種苗検査・品種保護の5つの業務を行っています。そのため、種苗管理センターの主要業務のほぼ全てを網羅している唯一の農場となっていますが、この5つの業務を継続して安定的に実施するために、チーム間の協力体制を図りながら、時には職員総出で各業務に対して実直に取り組んでおります。

最後に、ここでの休日の楽しみ方の一例を紹介します。雲仙農場は、雲仙天草国立公園に隣接しているため、国立公園内の登山道や遊歩道、キャンプ場などでアウトドアレジャーを手軽に楽しめて、ドライブやロープウェイで季節ごとに変化する景観を満喫することもできます。また、島原半島全体がユネスコ世界ジオパークに認定されているため、活火山をテーマにした施設やビュースポットなど、関連した見所もたくさんあります。



雲仙ロープウェイと平成新山

(雲仙農場)

特集【若手職員に聞く】～いま何してる？～

令和3年度に採用された若手職員に「いま何してる？」と聞きました。

…いま何してる？… 胆振：露木 稚菜 調査員、小路 歩実 調査員

胆振農場について

胆振農場の露木、小路です。私たちは令和3年4月に採用となり、本所での3ヶ月研修の後、同年7月から現在まで胆振農場で勤務しております。露木が原原種チーム、小路が検定チームに所属しており、普段は異なるチームで作業していますが、同期が同じ農場にいるのは大変心強く、業務のモチベーションにもつながっていると感じます。

胆振農場は北海道の安平（あびら）町にあり、農場周辺には競走馬や乳牛の牧場が多く、北海道らしい景色が広がっています。



選別機の設定

担当業務について

（露木）私が所属する原原種チームの主な業務は、ばれいしょ原原種の生産です。現在10品種のばれいしょ原原種を生産しており、メイン業務となる植付・収穫・選別作業にはパート職員も含め皆で取り組んでいます。

選別では、収穫した塊茎を選別機のカメラでサイズ毎に振り分け、最後は人の目で傷や病気の有無を判断し選別します。私は選別機の基本操作や設定を担当していますが、新選別機の初年度は具体的なマニュアルやノウハウもなく、1から操作を覚えなければならぬので大変でした。先輩・後輩職員とサンプルの塊茎を繰り返し選別機に流して、品種毎の設定値を確認するなど試行錯誤の連続でしたが、その甲斐あって現在はスムーズに選別作業が進められるようになりました。

原原種チームでは、トラクターによる栽培管理に加えて、茎長・茎数の生育状況を平年と比較して作業計画を作成する生育調査、試し掘りをして収量を予測する収量調査といった各種調査、冬季の土壌分析など多岐にわたる業務をチーム内で分担して行っているため、時期によって様々な仕事に携われるのも面白いところです。

（小路）私が所属する検定チームの主な業務は、栽培期間中はほ場から異常株（葉の形が異なる株やウイルス病に罹った株など）を除去する抜取業務、冬は次年度用種ばれいしょや配布した原原種、次年度植付け予定のほ場に対する検定の実施です。4年間、検定業務に従事していますが、まだまだ難しさを感じる仕事が多く、特に抜取業務は一番課題を感じています。



抜取の時に見ている景色

例えば、ほ場で萎れている株を見つけたとします。この「萎れ」という症状は水分不足、茎が折れている、病気に罹っているなどの理由から起こります。複数の原因が考えられるため株全体をよく観察し、除去すべきかどうか、病気であった場合はその後の対応はどうすべきか、見極める必要があります。ですが、この「見極め」を1日何万株と見る中で、素早く適切に行うことは非常に難しく、違和感を覚えた株の前で悩んでしまうことも多々あります。抜取技術の向上のために、ほ場で撮影した異常株の画像を資料と照らし合わせながら原因の確認をしたり、ウイルスを感染させたばれいしょを温室で栽培し、症状の目合わせをしたりすることで、自分なりに研鑽に努めています。また、一緒に抜取作業をしている職員と見つけた異常株について意見交換をすることも心掛けています。先輩方の経験談や自分に無かった視点からの気づきを聞くことはとても勉強になります。

休日の過ごし方

（露木）近くの千歳市や苫小牧市で買い物をしたり、家で動画を見たりと、のんびり過ごすことが好きです。連休など時間があるときには、同期で道内外の観光地や神社に行ったり、おいしいものを巡ったりしています。

（小路）仕事で植物を扱っている反動なのか、休日は馬やヤギなど動物と触れ合える場所に自然と足を運び、癒されています。また、私はパンがとても好きなので、目星をつけたお店に週末行くことも多いです。



今後の抱負

（露木）ばれいしょ原原種生産では、天候の変化や機械の不具合など、予期せぬ事態が多々発生します。私はまだまだ焦ってしまうことが多いので、熟練職員の皆さんのような柔軟な対応力を身に付けられるよう、これからも多様な業務を通じて知識や経験を積み重ねていきたいと思います。

（小路）検定業務は、配布した原原種の健全無病性を可能な限り保障するためにとっても重要な業務であると4年間を通して感じています。原原種を配布先の方々に安心して使っていただくことに少しでも貢献できるよう、一つ一つの仕事に真摯に取り組み、知識・技術を積極的に吸収し経験を積むことで、自信をもってできる業務を増やしていきたいです。

…いま何してる？… 西日本：吉田 和叶 調査員

農場紹介

西日本農場業務部の吉田です。私は、令和3年4月に採用され、本所、十勝農場での勤務を経て、令和6年4月に西日本農場に異動となりました。現在は、品種登録のための栽培試験業務に携わっています。西日本農場は雨が少なく、温暖な瀬戸内海気候の岡山県笠岡市にあり、バラやキクなどの主要な観賞植物を多く扱っています。



カーネーションの調査の様子

担当している業務

私はカーネーションの栽培試験を担当しています。4月には、耕種概要や栽培歴を盛り込んだ作業計画の作成や、カーネーションの草姿が乱れないようネットを設置する等のほ場準備をしました。また、5月には出願者から苗を受け取り、準備したほ場に定植しました。その後は作成した作業計画に基づき、追肥や摘心を行いつつ、病害虫の発生に気をつけて薬剤散布などで管理をしています。季節や品種によって発生しやすい病害虫が異なるため、過去の記録を参考に薬剤を散布していますが、思う通りに行かないことが多く、試行錯誤する毎日です。10月下旬から早咲きの品種が開花

し始め、調査が始まります。標準品種を指標にしながら、種類別審査基準にある草丈や花卉の色など様々な項目を調査しています。

栽培試験業務の中には、栽培管理や調査の他に、担当植物を栽培している温室の保守管理業務もあります。カーネーションは温室で栽培しており、温室には室内温度を管理するための遮光カーテンやビニール素材の側窓カーテンなど様々な機能がついています。しかし、経年劣化によりビニールカーテンが破れる等、補修が必要になることがあります。補修作業では、私生活で目にしないような様々な部品や資材、道具を使うため、新たに知ることが多く、少しずつですが知見を得ていると感じます。

また、私が所属するチームではカーネーションの他にバラなどの植物種類を担当しているため、繁忙期には横断的な協力体制のもと業務を実施しており、担当以外の様々な植物に関わる機会もあります。

これからの抱負

栽培試験を担当するのは初めてなので、わからないことが多いですが、先輩職員に指導を仰ぎ、つつがなく報告書を提出できるよう調査することが今年度の目標です。また、初めて使う機械や道具なども多いため、機械の操作方法や道具の使い方を覚え、来年度はよりスムーズに作業できるようになりたいと思っています。

日常の楽しみ、過ごし方

全国転勤により様々な土地を訪れることができるため、私生活では異動に合わせて観光地を巡っています。十勝農場で勤務をしていた際は、花畑牧場や白い恋人パークなどに行き、北海道を満喫しました。最近では福山城やカブトガニ博物館に行き、次の転勤まで中国地方や四国地方を十分に堪能することを目標に観光計画を立てています。



福山城



種子島宇宙センター

自己紹介

鹿児島農場の大野です。令和3年4月に本所の種苗戦略室に配属され、令和4年4月から鹿児島農場で勤務しており、4年目になります。

鹿児島農場について

鹿児島農場のある種子島は薩南諸島の北端に位置し、温暖な気候を生かしてさとうきびやサツマイモの栽培が行われています。また、種子島宇宙センターや安納芋の産地、鉄砲伝来の地として有名です。

印象に残った仕事について

私はこれまでに病害担当として主に肉眼検定やラボワーク、原原種生産担当としてトラクターを使用したほ場での作業に携わってきました。時が経つのは早いもので赴任後3年が経過し、最近では後輩職員も入り、技術伝承を行う立場として人に教えることの難しさを痛感しながら業務を行っています。

印象に残っている仕事として、初めて来客対応を任された小学生への食育授業について紹介します。令和5年11月、地元の小学生（11名＋教員2名）を対象とするさとうきびに関する授業の依頼が届きました。小学生にも理解してもらえるようなプ



食育授業

レゼン資料や興味を持ってもらえる展示品の作成を心がけましたが、自分自身このような経験は初めてだったので楽しんでいただけると不安でした。しかし、その心配も杞憂に終わりました。当日は真剣な表情で授業を聞いてもらえるばかりか、質問が積極的に飛び交い、子供ながらに重要だと感じたところは学習ノートにメモを取ってくれていました。後日、児童の皆さんからお礼のお手紙を頂き感想を読むと、自分が伝えたいと思ったことがちゃんと伝わっていることに感謝し、自身の励みになりました。今後もこのような機会があれば積極的に担当していきたいと思います。

この時経験したことは後輩や上司が相手でも通することではないのかなと思いました。相手がどこまで理解できているのかを考え、理解しやすい資料を用意する、質問があったときには理解しやすい回答を心がける。改めてその重要性に気づくことができた食育授業となり、私の成長にも貴重な体験となりました。

今後の抱負

後輩職員への正確な技術伝承を心がけて実施していくことはもちろんのこと、自分自身で知識が足りてないことに関しては自己研鑽に務め、鹿児島農場でのキャリアを悔いの残らないようにしていきたいと思います。

業務時間外の過ごし方

種子島はアオリイカの聖地と呼ばれ、大会が開催されるほどイカ釣りが盛んに行われています。休日には釣り好きな職員で海に出かけることも多いです。3キロを超えるアオリイカを釣り上げた時は興奮とともに爽快感が漂い、いい気分転換になっています。釣りが好きな方は是非種子島へ！

トピックス

◆海外から来所された方々との技術交流について

＜タイから農業省植物品種保護局の担当職員の来所＞



集合写真

令和6年9月25、26日に、タイ農業省植物品種保護局の担当課長等3名の訪問を受け入れました。

来所された課長は、かつて JICA 研修で来日したことがあり、その際に当センターで行われた講義や実習で毎日通った部屋や建物のことをよく覚えており、当時と変わらないと懐かしんでいました。また、この時に学んだことは帰国後に活かされて現在のキャリアを築き、今回、再来日の機会を得ることができたことにとても感激していました。さらに、今年度の JICA 研修にタイから若手の部下が参加した中、イチゴの審査

基準作成の担当者だが、調査経験がなく形質の設定や調査方法が分からないため特別研修の希望があり、8月には研修時間外に特性調査を行う職員から審査基準を作成するためのアドバイスをしていたことから、感謝の言葉もいただきました。

当センターで毎年実施している JICA 研修を通じて、このような国際貢献が目に見える形で実感できたことは、とても誇らしく思いました。こちらもこのような気持ちに答えられるよう、2日間の限られた日数でしたが、特性調査業務等の最新情報が理解されるよう対応しました。

初日は、栽培試験や植物品種保護業務の他、イチゴやクルクマの栽培試験の実際について説明し、意見交換しました。特につくばで栽培試験実施中のクルクマは、タイで出願が非常に多く、日本にも出願している品種があるため、とても多くの質問が出された他、国際標準となるクルクマの UPOV テストガイドラインを日本がリードして作って欲しいなど強い要望もありました。

2日目には、果樹の栽培試験地におけるブドウの試作状況を視察し、その後ホームセンター等で実際に流通している登録品種と表示を見学しました。海外からの様々な植物種や多数の品種が見られ、これは日本の植物品種保護制度が充実していることによるところと理解し感銘を受けていました。

2日間を通じて、日本の種苗法に基づく品種登録制度や、現在の業務状況について理解を深めていただけたと思います。今後まだまだ発展途上のタイの品種登録制度が充実し発展していく様子が見られることが期待されます。



意見交換

< 中国から栽培試験専門家の来所 >

令和6年 10 月9日に、中国各地（北京市、上海市、吉林省、福建省）にある農業農村部植物新品種試験サブセンターから5名、江漢大学から1名の計6名の専門家の訪問を受け入れました。

種苗法に基づく日本の制度の理解を得るため、栽培試験や種苗検査の業務説明を行った他、温室やほ場で実際の試験について説明しました。中国側からは、中国全体での栽培試験状況や北京サブセンターにおける栽培試験についてプレゼンがありました。

中国では、北京で年間 1,500 点、上海で年間 2,500 点の出願があること、さらに、トウモロコシだけでも年間 1,000 点の出願があるとのことで、日本における全植物種類の年間 1,000 件程度の出願状況と比較し、桁が異なる規模に驚きました。中国ではこのような膨大な出願品種に対して、限られた職員で審査を行わなければならない状況にあり、これを新技術の導入によって解消する試みが急務とのことです。品種毎の写真のデータベースを充実させたり、画像上でトウモロコシの粒数を自動でカウントできるようにしたり、また、DNA 新技術の活用などを検討しているとのことでした。

一方で、中国では画像解析にあたり、色標識がある定規を用いるとしても、統一的な商品規格がなく一定の評価が困難であることや、特性調査ができる人材の育成が課題とのことでした。このため、日本から質の高い製品の提供を求める要望や、人的交流を増やしていきたいとの希望がありました。その他、業務に対して多数の質問があり、こちらからは丁寧に回答したことに加え、翌日には、出願数の多い種類の栽培試験を実施する西日本農場へ立ち寄り、キクの栽培試験について実際の現場視察を行ったことで、さらに日本の品種登録制度への理解を深めていただけたと思います。



栽培試験温室見学の様子

この訪問中、とにかく貪欲に情報収集する姿は、見習わなければならない部分と思いました。先進技術を積極的に取り入れていく中国の今後の動向に注視しながら、中国における品種登録制度の充実に向けた交流を今後も行っていきたいと思います。

（特性調査業務課 三國誉征）

◆NEWS 冬のオンライン一般公開 2024 を配信中！

12月21日（土）に「農研機構 冬のオンライン一般公開 2024」を、ニコニコ生放送[®]にて開催しました。

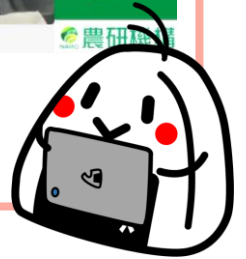
冬のオンライン一般公開 2024 では、生産現場の課題である気候変動や鳥（カモ）に対する取り組み、スマート農機開発の最新情報、多収ダイズの新品種「そらシリーズ」などについて、一般の方々が楽しく、さらに農業と食品への理解を深めていただけるプログラムとなっております。

各地の研究拠点を紹介するコーナーである「列島リレー」において、種苗管理センターは北海道中央農場からミニチューバー生産についてご紹介しましたので、ぜひお楽しみください。



アーカイブ配信は以下の URL からご覧ください。

<https://live.nicovideo.jp/watch/lv346244891>



<編集後記>

令和 7 年（2025 年）の干支は乙巳（きのとみ）、柔軟性と適応力、再生と変化の意味を持つ年だそうです。種苗管理センターにおいても何か新しいことが始まったり、いろいろと変化の訪れる年なのかもしれません。近年は異常気象や災害など日本の各地でその対応に追われることが多いですが、乙巳の年は又、努力を重ねて物事を安定させる縁起の良い年とされているとのこと。周囲のご協力も得ながら着実な業務の運営が行えたら…と願っております。

（種苗戦略室）

（編集・発行） 農研機構 種苗管理センター 種苗戦略室

茨城県つくば市藤本 2-2

TEL 029-838-6587 FAX 029-839-1183

ncss-info@naro.affrc.go.jp

<https://www.naro.affrc.go.jp/laboratory/ncss/>

<令和 7 年 1 月>